

# 棚田学会通信

第70号 目次 2023年6月30日発行

棚田耕作と「まつり」のつながり ..... 2  
 中山千枚田の伝統行事と棚田の耕作について ..... 5  
 棚田の里 神楽の里 ..... 7  
 岐阜県下呂市 三ツ石棚田  
 ～棚田を核とした地域の振興～ ..... 8  
 棚田保全活動のキーワードと伝統行事 ..... 9  
 事務局ニュース ..... 10

地域・里・村・郷づくり 標高 活動 景色  
 続ける 未来 地域一丸・一体・村丸ごと 農地  
 アルプス 交流活動 日本酒 伝える 夕映え 歴史  
 都市農村交流・農村交流 おもてなし 里・郷  
 子供 地域 祭り・祭礼 豊か みんな 低タンパク  
 隠れ里 耕作放棄地 維持保全・維持管理  
 次代・次世代 元気 風景 あなた 環境教育 雲海  
 感じる 原風景 加工品 美味しい 地域振興 トキ  
 農業 魅力 水 棚田オーナー  
 渓谷 棚田米 後世 私たち つなぐ  
 農業・農村体験 元気 景観 ホタル 知名度  
 継承 伝統・文化 暮らし 地域おこし  
 目指す 守る 天空 活用 彩り ふるさと  
 昔ながら 生業 楽しむ 里山・山里  
 都市住民 1,200年 地域活性化 彼岸花 安心安全  
 農村 取り組み 残す 生産 共存 恵み 神楽 活かす  
 麓 アート 富士山 美しい 価値・価値向上  
 たたら 広がる 米づくり 美しい 価値・価値向上  
 絶景 日本 体験 清流 人々 育む 財産 集落住民  
 石積・石垣 海 自然 保全 望む・眺め・一望  
 良食味米 元気 山・山々 千枚田 日本海 良質 夢・希望

「つなぐ棚田遺産」認定棚田の個票（農林水産省 HP に掲載）の頭には、各地区での活動のキャッチフレーズが記されています。そこにあった様々なキーワードについて、類似語をまとめて2地区以上で使用されていたものを抽出し、掲載回数の多寡で文字のサイズ・色を変えて一覧にしたのが今号の表紙です。非常に幅広いキーワードで活動しているのが分かりますが、中でも今号担当者が目を留めたのは、「祭り・祭礼」「神楽」といった伝統行事です。住民等の気持ちが「ぎゅっ」と一つになる瞬間があることは、棚田を集落で守っていく上でとても大事なことと考えたためです。そこで今号では、それらを今につないでいる実践地の報告から「伝統行事と棚田の関り」について、学んでみたいと思います。  
 (棚田学会編集委員会)

## 棚田耕作と「まつり」のつながり

國學院大學大学院客員教授・名誉教授 小川 直之

### ■「まつり」「政」と「食国の政」

「まつり」という言葉は、江戸時代以降、本来の意味を超えて多義化し、喧嘩や男女の結びつきという意味でも使われ、さらに近年では人々が集まっている催事にもこの名が使われている。溯って平安時代や鎌倉時代の文芸の世界では「まつり」といえば京都の下鴨神社・上賀茂神社の祭礼である「賀茂祭(葵祭)」のことで、この言葉にいくつもの意味を持たせることは古くに始まっている。

では、「まつり」の原義、本来の意味は何かといえば、それは神に食べ物などの供物を捧げ、神の意に従うことである。その語源説にはいくつものがあるが、「たてまつり(奉り)」とするのが最も有力で、定期的にあるいは折に触れて貢ぎ物を奉り続けることから、「まつり」から「まつろふ」という神への服従の意味をもつ語が成立したといわれている。「まつり」が供物を奉ずることであるのは、例えば『日本書紀』の孝徳紀にある、棺は木の隙間に漆を塗って密閉し、「奠は三たび過飯(むけ)よ」の「奠」を「まつり」と読むことからいえる。「奠」は供物のことで、葬儀の香典は「香奠」が正しい表記である。

貢ぎ物という神への服従の意思表示によって神の加護が得られるという論理であるが、ここにはもう少し複雑な社会や信仰の構造が存在している。それは、「政」を「まつりごと」と訓じること、『古事記』や『万葉集』にある天皇による統治領域を「食国(をすくに)」と表現することに顕れている。両者をあわせて「食国の政」とする表現もあり、この言葉は国を統治するという意味に使われている。「政」を「まつりごと」というのは、祭政一致を意味しているのはいうまでもなく、このことをより具体的に論じたのは国文学者・民俗学者であり、歌人でもある折口信夫(1887～1953年)で、折口は、収穫した農作物を神に供えるのは、農耕を始める年の初めに、天の神が帝(天皇)を通じて人民に作物の豊穰をもたらす寿詞・呪詞を授け、それによって豊かな稔りが実現したことを、収穫物を奉ることで帝を通じて天の神に報告する。こうした「たてまつり」の行為を、「まつり」というようになった。そして、農耕開始の寿詞・呪詞と収穫後の「まつり」によって「飢え」のない世界が実現でき、こうした毎年の祭祀行為の循環が統治の根幹に据えられたことから、「政」

を「まつりごと」といい、国家統治を「食国の政」というようになったと説いている(1947年「祭りの話」『折口信夫全集』17所収)。「食国」というのは、豊穰の寿詞・呪詞の力が及び、それが実現される領域ということである。

現時点で、「まつり」の原義、「食国の政」の意味については、この折口の説を超える見解はなく、こうした国家統治の思想と仕組みは、現在の伊勢神宮の神嘗祭や宮中の新嘗祭・大嘗祭に顕れているし、ムラの祭り、さらには家々での豊作祈願や収穫の儀礼にもうかがえる。神への貢ぎ物は農作物だけではないし、貢ぎ物の神饌には神と人との共食という意味もあるが、「まつり」はその原義からいえば、棚田も含む農耕と一体のものといえる。なかでも稲作においては、後述するように、これに伴う「まつり」である儀礼が色濃く伝承され、田の神が祭られ、稲魂の信仰もうかがえ、その耕作自体が「まつり」としての性格をもっている。

折口がいう農耕開始に先だつ年の初めの寿詞・呪詞による豊穰の約束は、現在継承されている各地の「まつり」をみていくと、単に言葉だけでなくそのための祭儀や芸能をみることができる。例えば、近在に小規模な棚田もある中山間地の宮崎県日南市北郷の潮嶽神社では毎年2月11日の例大祭に「福種子おろし」の神事と神楽奉納が行われている。「福種子おろし」というのは、祝詞奏上後に拜殿で神職が稲の種籾を撒く神事で、参列者たちは撒かれた種籾を我先にと掻き集めて持ち帰り、自家の種籾に混ぜて苗代に蒔くと豊作になるといわれている(写真1)。神社で撒かれる種籾は、神の授けもので、神職による作占も行われている。この神社は、日向灘とはやや離れているが、社名からうかがえるように潮(海)と嶽(山)の信仰をもつ神社で、この祭りには海の漁師はマグロなどを、山の猟師は猪頭を



写真1 宮崎県日南市 潮嶽神社「福種子おろし」



写真2 潮嶽神楽「御笠舞」

奉納し、里と海と山の豊穡が祈念されている。「福種子おろし」の後の神楽では、15の演目のなかに田植えの所作を舞う「御笠舞」(写真2)や収穫の所作を舞う「箕取り舞」、さらには漁撈の所作の「魚釣り舞」がある。

もう一例あげると、やはり中山間地にある長野県下伊那郡阿南町新野で1月13・14・15日に斎行される国の重要無形民俗文化財である「雪祭(ゆきまつり)」では、14日夜の伊豆神社での神事芸能の最初に「サイホウ」が登場する。このサイホウは右手に松枝、左手に団扇を持ち、頭には赤手拭を被り、角のような細長い突起がついた藁製の冠を被り、腰にはホッコウと呼ぶ男根状の棒を差している。サイホウが被る冠の角の先端には紙で包んだ米・粟・稗・コキビ・大豆が結ばれている(写真3)。この姿からサイホウは、新たな年の農作の種子を受け取る神と解釈できる。また、サイホウは腰のホッコウを手を持ってまつりの場にいる女性たちに擦り付けてまわり、この棒は明らかに孕み棒で、この行為は豊穡をもたらす呪術である。

ここにあげた「まつり」は棚田あるいは棚田地帯固有のものではないが、棚田での稲作が、その地域の「まつり」と結びつく必然の一つは、2つの具体例からもわかるように、上記の「まつり」の原理にあるのがわかる。「つなぐ棚田遺産」として「まつり」が関連付けられるの



写真3 長野県下伊那郡阿南町新野「雪祭」のサイホウ

は、「まつり」の仕組みとして、先に述べたような神による豊穡の約束と、その結果報告としての作物の「たてまつり」が底流しているからといえる。

### ■棚田の維持と「まつり」

棚田という水田耕作がもつ価値付けに際しては、等高線に沿ったテラス状の水田を形成させる自然条件と、その耕作維持をめぐる技術的、経済的、環境的など、いくつもの視点と論点があるのはいうまでもない。ここではこれらすべてには触れないが、例えば技術的というのは、水田稲作には必須である灌漑水の保持のための土坡や石垣の構築があり、その技は長年にわたる耕作者による工法の伝承が重要となる。この伝承工法は、耕作者にとっては生活のなかの技術文化といえ、ここには地域の家々による相互扶助といった労働慣行も関わっている。

棚田学会以外の学会では、農業土木学会が2001(平成13)年12月に「新たな〈水土の知〉の定礎に向けて」を公表し、2004(平成16)年には水土文化研究部会を立ち上げて研究会を始め、2007(平成19)年からは学会誌名を「水土の知—農業土木学会誌—」に、学会名を「農業農村工学会」に変更したのも、上記のような点も含め、広汎な水土文化への視野拡大が必要だったからといえよう。「水土」は「風土」に対峙する用語であり、日本では空海の漢詩文集である平安時代の『遍照發揮性靈集』にあって、その意味は水と土によって生かされている人間は水土の一部であると読み取れる。「水土」はその後の南北朝期の『曾我物語』や15世紀後半の『日本書紀桃源抄』などにみられ、これらは水と土で形成される大地の意味と解釈できる。

農業土木学会では「水土文化」について、『農業土木学会誌』73巻1号(2005年1月)で小特集「水土文化遺産」を組み、佐藤常雄「水土文化の原風景」、広瀬伸「水土文化遺産研究の地平」、拙稿「水土文化研究のフレームワーク：民俗学の立場から」などを掲載している。農業土木学会は、その後、学会誌で「講座 水土文化への誘い」も連載し、筆者もその6として「水土文化の見方：コトを見よう」(74巻8号)を執筆しているが、こうした動向は土地改良建設協会にも及び、2006(平成18)年には「水土の知」についての講習会を開催し、『土地改良』252号、253号にその講演を掲載している。農業土木学会では創立80周年記念として『水土を拓く—知の連環—』(2009年、農文協)を発刊しているし、先にあげた広瀬伸は水土文化研究の成果として『水虎様への旅』(2017年、津軽書房)や『黒鍬さんがゆく—生成の技術論』(2019年、風媒社)

を著している。

こうした動きからは、棚田がもつ文化、あるいは関連する文化への関心は棚田学会の創設（1999年8月）期には、関連する他学会にも生まれていたといえるが、こと先にあげた灌漑水の確保とその保持に関しては、戦後から農村社会学や民俗学、歴史学の分野でも共同体論として議論が進んでいて、小規模錯圃制耕地形状のもとでの用水利用が地域の家々の統合、連帯をもたらし、共同体を形成することが議論されていた。棚田が存在する地域にとっての社会的な意味もここにあることは明白である。小規模錯圃制耕地形状というのは、ある領域の水田は小規模に区画されていて、しかも個々の水田は集落内に居住する家々が分散したかたちで所有されているという耕地の在りかたで、その領域内の水田所有者は協力、連帯し合うことで灌漑水を得ることができ、しかも水田を耕したり、田植えをしたりなどの作業も、同時期に行うことが必要となる。さらに病害虫の発生は、1枚の水田だけの問題ではなく、その領域全体にかかる負荷となる。

集落の家々は、ほぼ同じ時期に同一作業を行うという「農は人並み」という農業倫理観もここから生まれてくるし、ユイやモヤイなどの家々の協同・共同による連帯もこのなかにある。耕地の形状や所有の在りかた、灌漑水確保、農作業の進捗や労働慣行は、一方ではその地域の鎮守社の祭りなどと一体化し、さらには共有山や共有地の利用も存在し、農村においては、地域を一つの社会として統合する紐帯、要件は一つではなく、いくつもが併存してきた。これが棚田耕作と「まつり」とが結びつく二つ目の原理である。

しかし、耕地の土地改良の進展、用排水路の整備、農作業の動力機械化、高度経済成長といった経済活動の変動等などは、このような社会統合の様相を変容させていったことは様々な研究によって明らかになっていて、2000年代になっての少子高齢化の進行は、とくに棚田がある中山間地域のコミュニティー維持に大きな課題を投げかけている。

#### ■宮崎県の棚田と神楽

棚田地帯の社会が大きく変容しているなかでも、例えば宮崎県北部に立地し、「つなぐ棚田遺産」に認定された尾戸の口、東岸寺扇の峰、徳別当、川登（栃又）の棚田がある高千穂町では、土呂久川を水源に岩戸、三田井地区の川登から上原に到る岩川用水が1896（明治29）年に開通し、これは山腹を流れる用水として今も利用されている。約20kmであった用水路は、現在では40kmほどに及び、

多くの棚田で使われるようになっていて、これが通る各集落での用水路の維持管理の態勢は、この地方の代表的な伝承文化である神楽の継承とも関連している。棚田耕作や用水路の維持管理と地区の神社の祭りとして斎行される神楽の継承とが連関しながら地域社会としての連帯、連携が持続しているといえよう。

高千穂町には「高千穂の夜神楽」という名称で1978（昭和53）年に国の重要無形民俗文化財に指定された神楽があり、町内にはほぼ集落を単位とする31の神楽保存会が組織され、毎年11月下旬から2月にかけて地区の神社の例大祭などに、33番の演目をもつ神楽が斎行されている。集落によって演じられる演目には差異があるが、黒仁田や尾狩の神楽には「田植神楽」といい、この中で牛による代掻き、鍬での耕起、畦塗り、早乙女の田植え、箕や杵での収穫の所作が演じられている。こうした31の保存会は「高千穂の夜神楽伝承協議会」として組織され、それぞれが連携しながら神楽の継承事業にも取り組んでおり、神楽斎行が地域コミュニティーの持続の力となっているのである。高千穂町には神楽の舞手であるホシャドンが500名ほどいて、子どもたちが演者となる子ども神楽も積極的に行われて後継者育成にも努めるとともに、1972（昭和47）年から毎晩、高千穂神社境内の神楽殿で高千穂神楽（写真4）として「手力雄の舞」「細女の舞」「戸取の舞」「御神体の舞」の4番が舞われ、多くの観光客が見学している。

棚田があるムラの神楽としては、同じく「つなぐ棚田遺産」に認定された「下松尾仙人の棚田」がある宮崎県椎葉村には、1991（平成3）年に「椎葉神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定された神楽が26集落にあり、11月から12月に夜を徹しての夜神楽がある。棚田がある松尾地区には、栗の尾、畑、水越の3集落に神楽が伝承されていて、現



写真4 高千穂神社神楽殿での高千穂神楽



写真5 宮崎県椎葉村尾向地区で現在も続く焼畑

在ではこれらが合同して神楽齋行を続けている。

ここに取り上げた高千穂町と椎葉村は、日之影町・五ヶ瀬町・諸塚村とともに2015(平成27)年に「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」としてFAOから世界農業遺産の認定を受けている。その認定では焼畑農業(写真5)、山腹用水路と棚田、伝統文化と地域の絆などが特徴としてあげられ、棚田をはじめとする農山村の文化や経済の複合が地域個性として重視されている。こうしたことから棚田を、その存在や景観だけで捉えるのではなく、その背後に継承されている文化や社会・経済システム、価値観などを視野に入れる必要があるのがわかる。その具体例の一つが「まつり」である。

最後にもう一つ、棚田を舞台とする「まつり」や儀礼を加えておくと、例えば棚田オーナー制度を国内で最初に行った高知県梶原町神在居に近い津野町北川の宮谷集落には、16世紀まで遡ることができる棚田があり、この棚田では田植え前には田の畦にウツギの枝を差し、この下に米やジャコ、干柿、揚げ餅などを供え、畦の脇に稲苗を3株植えてオサバイサマを祭った。この祭りを行ってから女性たちが緋の着物に赤いタスキ姿のソートメ(早乙女)となって田植えを行った。自家の田植えが終わると、根を洗ってきれいにした糯米の苗を一握り持ち帰り、一升枡に入れて家の炊事場に祀るエビス様に供えたと伝えている。このほかにも水田稲作には儀礼があって、稲作自体が「まつり」としての性格をもっていた。ここで伝えるオサバイサマが田の神であり、田植えとともに棚田にはこの神が降臨したのである。

棚田をめぐる「まつり」や儀礼をいくつかあげてきたが、これらは棚田固有の「まつり」ではなく、いずれも平野部でも行われている。しかし、重要なことは棚田地帯ではこうした「まつり」や儀礼の伝承が顕著に継承されているということで、中山間に立地する地域でのコミュニティーや活力の持続に

は、棚田と関連する「まつり」が一つの鍵になると思われる。

### 中山千枚田の伝統行事と棚田の耕作について

小豆島町地域おこし協力隊 中山棚田活性化推進員

小木曾 裕紀

小豆島のほぼ中央の中山間地域に位置する中山地区は、「日本の棚田百選」や「つなぐ棚田遺産」に選ばれた中山千枚田を中心に、奥深い山々や初夏には蛍が舞う美しい清流、そして点在する民家で構成され、「美しい日本の歴史的風土100選」や「にほんの里100選」の一つに数えられるなど日本の原風景が残る地域です。

中山地区には、棚田の米作りと密接に関係のある伝統行事が二つあります。

一つ目は、「中山農村歌舞伎」です。江戸時代中期(約300年前)、お伊勢参りに出かけた島人たちが荒天で船待ちをしている際に、上方歌舞伎の華やかな世界に触れ、歌舞伎の名場面を描いた絵馬や衣



湯船山から見る田植え時期の中山千枚田



中山農村歌舞伎(演目は大正時代に上演されたきり途絶えていた「小豆嶋」)



復活した伝統行事「虫送り」

装を島に持ち帰り神社に奉納したのが起源と言われています。農村歌舞伎は五穀豊穡の奉納歌舞伎として、役者から裏方まですべて地元の人々の手で上演されています。

二つ目は、「虫送り」です。約300年前から伝わる伝統行事で、半夏生の日に「火手（ほて）」と呼ばれる松明をかざしながら棚田の畦道を歩き、害虫の被害にあわずに豊作になることを願うものです。虫送りは中山地区では一度途絶えてしまいましたが、映画「八日目の蟬」の重要なシーンの撮影で再現されたのをきっかけに、撮影の翌年に復活し、コロナ禍による中止を除き現在まで続いています。

これらの伝統行事が中山千枚田の耕作にもたらす役割は二つあると考えます。

第一に、地域の結束です。棚田の耕作には水路掃除や一斉草刈り、農道・水路の管理や修繕等、様々な共同作業があり、地域の結束は必要不可欠です。特に農村歌舞伎は子供から大人まで幅広い世代が役者や裏方として大勢参加し、地域の結束を深めることに寄与しています。

小豆島全体の伝統行事で「太鼓まつり」という秋祭りがあります。島内の各地区から太鼓台が集まる中で、「中山の太鼓のあがり方はきれい」という声がよく聞かれますが、これは地域の結束が強い証拠

かもしれません。

第二に、棚田保全の機運醸成および保全活動の推進です。中山の虫送りが映画「八日目の蟬」で有名になったことで、中山地区は観光地として注目を浴びることとなりました。観光客が多く訪れるようになったことで、賑わいが創出され地域に活気が生まれただけでなく、地元の方にとっては「当たり前」の景色である棚田の魅力が再認識され、棚田を守っていこうという機運が高まりました。それを受け、地元と行政、農村再生の専門家間でワークショップを重ね、虫送り復活の2年後に「小豆島町中山棚田協議会」を発足させました。同年に行政側でも小豆島町農林水産課に「棚田保全係」を新設し、官民一体となって棚田保全により一層力を入れるようになりました。

棚田協議会の発足前のワークショップでは耕作面積が急速に減少していくのではないかと危惧されていましたが、結果的には棚田協議会発足から現在までの10年で約1割耕作面積が増加しています。これは、伝統行事である虫送りの復活が一つのきっかけと言えます。

しかし、伝統の継承にも課題があります。中山の農村歌舞伎舞台は天保年間以前に建てられたと言われており、国の重要有形民俗文化財に指定されてい

ますが、建物の傾き等の理由で現在大規模改修が行われています。コロナ禍で2020年、2021年は上演がかなわず、2022年は非公開での上演、2023年は舞台改修中で上演できないことを考えると、今後に不安が残ります。

また、舞台の改修には多額の費用が掛かり、国の補助金などを使っても非常に大きな地元負担が発生します。工事費が当初の想定を超える可能性が高くなったことを受けてクラウドファンディングを検討しており、実施の際は棚田学会HPの「会員便り」に詳細を掲載させて頂こうと考えておりますので、皆様にもご協力頂けると幸いです。

### 棚田の里 神楽の里

都川地区まちづくり推進委員会 会長 新森 増美

私たちの住む島根県浜田市旭町都川（つかわ）地区は、中国山地の山懐に抱かれた清流と緑豊かな農山村です。我が都川の田舎は、ご多分に漏れず過疎と高齢化の進行が激しく、2023年2月末現在、65歳以上の高齢化率は73.0%（世帯数112戸、人口200人）と、浜田市の中でも最も高い地域となっています。都川の農村風景の主役は、つなぐ棚田遺産にも選ばれた4団地の面積4.8ha、枚数112枚を中心とする歴史的風致の「石垣棚田」です。この石垣棚田は、江戸時代から精力的に築かれたものです。都川全体が谷になっていて平地が少ない。山を掘り返すと岩が多く、大きな岩盤も顔をのぞかせる。こうした悪条件の中で新田を造るため里人は広島県山県地方から来た職人の石組み技術を習得して築いたと伝えます。この技術は自然石を横に寝かせて重ねる「穴太（あのを）積み」工法で、石垣に奥行きがあって安定するので高さにも対応できる。このため高さ6mに達する場所もあります。

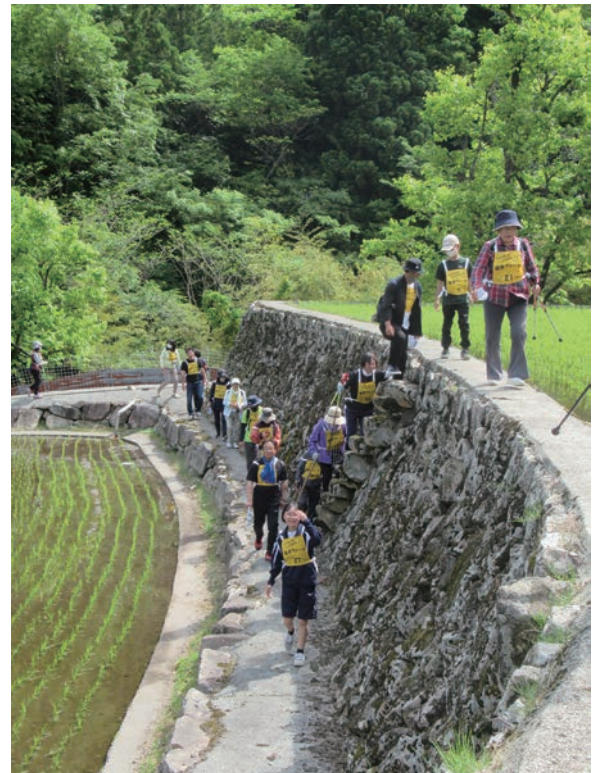
また、石垣を組んだ後の埋め込みは、山の土を水の勢いで田んぼに流す「洗い込み」という、カンナ流しと同様の技術を用いました。さらに、私たちの地域には、全国に誇れる日本遺産認定の伝統芸能「石見神楽」があります。石見神楽は、謡曲を神能化した民衆の娯楽として演劇化されてきたもので、地区の鎮守様を中心に、秋季大祭や八朔祭の前夜祭（よごろ）には、舞手と観客とが一体となり数多くの演目が深夜遅くまで奉納されています。

過疎と高齢化の進行も激しい中、石垣棚田や石見神楽というせっかくの農村景観や貴重な歴史的遺産

を何とか後世に残していきたい、との思いから皆で知恵を出し合い取り組んでいます。その一つが石見神楽を活かした交流イベント「交流神楽 in 都川」の実施です。地元と広島神楽団体との共演によ



「交流神楽 in 都川」 中川戸・滝夜叉姫ほか



都川地区での棚田トレッキングの様子



都川地区での棚田トレッキングの様子

て広島方面からの来客を期したものです。いま 18 回を数え、毎年会場に入りきれない程の観衆に手ごたえを感じています。

次には石垣棚田を活用した「棚田トレッキング」の開催です。これは石垣棚田のあぜ道を歩いて体感するものです。2017 年から始めたトレッキングはいま 6 回を数え、多くが地区外からの参加者です。また農家の縁側に腰を掛け、棚田風景を眺めながら休憩の場とする「縁側喫茶」も 12 年目となり、遠来の方々から満喫の賛をいただいています。

こうした取り組みなどを交え、伝統の石見神楽の継承とともに、想像を絶する先人の苦労を形にした美しい棚田景観を次の世代に確実に伝えたい。それが私たちの想いです。

岐阜県下呂市 三ツ石棚田  
～棚田を核とした地域の振興～

三ツ石棚田連絡協議会 会長 中島 巳代治  
事務局長 今井 政良

三ツ石集落は、日本三名泉にも数えられる岐阜県の下呂温泉街から東へ 10km 余りの白草山の麓に位置する集落で、35 戸の住居があり、160 名の方が住んでいます。集落の名前は、地域で信仰されて

いる「三ツ岩」と名付けられた 3 つの大岩に由来しています。

三ツ石棚田は平成 20 年 12 月に岐阜県から「ぎふの棚田 21 選」に選定され、令和 4 年 2 月には農林水産省から「つなぐ棚田遺産」の 1 地区として選定されました。標高 700m の高地で、面積約 11ha の農地を 23 戸の農家が耕作しており、うち 2 戸が夏秋トマトを生産しています。当面はこの棚田ブランド米を年間

200kg 販売することを目指しています。

本地区の棚田は、昭和 60 年からの土地改良事業で景観に配慮した再整備が実施されました。以前は大小様々な棚田が馬と人の手で耕作されていましたが、土地改良事業によりほ場や農道、水路が整備され、農業用機械の導入が進んで作業がスムーズとなったほか、住宅への進入路が確保されて一般車両の出入りが容易になりました。



大岩「三ツ石」



三ツ石の棚田

更に平成に入ってから、簡易水道事業で棚田最上部に浄水場が設置されて、区内へ配水されています。引き続いて下水道事業も実施され、各家庭に水洗トイレが普及し、居住環境が整いました。その結果、Uターンしてくれた若者や移住してくれた方の子供たちが増え、今では人口の 25% が 18 歳以下の子供たちです。こうした子供たちのために、平成 2 年に集落でプール建設事業が持ち上がり、不在地主の土地を用地交換して、20m プールと小さなグラウンドを整備しました。夏休みには保護者が交代で監視人となってプールを運営しています。プールの水





高齢者たちのレクリエーション

は浄水場の余水を利用しているため、水道代はかかりません。また、子供会では夏祭りを開催し、ゲーム、きもだめし、花火等が行われていて、子供たちの楽しみの一つとなっています。プールに併設されたグラウンドでは、下校後や休日に子供たちがサッカーボール等で遊ぶ姿が見られるだけでなく、平日の昼には高齢者が健康と交流を目的にゲートボール、パタンク等の軽スポーツを楽しんでいます。

グラウンドの隣には地区集会所と地藏堂及び秋葉神社があり、新年に互礼会や地区の会合等を行っています。地藏堂では毎月5日に中老会の女性十数人が集まり、地藏様にお経を唱えてお参りと交流をされています。2月中旬にはどんど焼きがあり、春と秋に祭りが行われ、春祭りには子供たちも交えて団子投げが行われます。夏には円座になって念仏を唱えながら大きな数珠を回して願い事をする「九万九千日」の供養が行われます。11月には男性だけがその年にとれた餅米を持ち寄り、石うすでついた餅をお供えする収穫祭が行われ、翌年の鍵取りを決めるくじ引きをします。

秋葉神社では新年の初詣のほか、建国記念日には



中老会による地藏堂のお参り



収穫祭の餅つき



秋葉神社の例祭

祭礼が行われます。1月に静岡県浜松市にある秋葉山本宮秋葉神社へ代表数名が参拝し、お受けした御神符を祀り込みます。昭和30年代後半、落雷により2回も住宅火災が発生した年があり、集落の安全を祈念してお祀りする事になりました。このほか、山仕事をする家ではそれぞれの山に山の神の社を持ち、一族でお祀りするなど生活と信仰が深く結びついた集落となっています。

近年ではイノシシやシカ、サルによる農作物等の被害が多くなったため、令和2年度に国の補助事業を受けて地域ぐるみで周囲4kmにわたりメッシュと電気柵を併用した獣害防止柵を設置したところ、目立った被害が起こらなくなりました。集落内の景観に配慮し、毎年空き地や法面にはなももの苗木を植えており、春にはきれいな花が見られます。現在は集落内に200本程度植えてありますが、今後も苗木を増やして育ててゆく予定です。

自然に恵まれ、地域の皆がそれぞれの立場で協力して保全してきた美しい棚田の風景を、次の世代に引き継いでいきたいと思っています。



三ツ石のはなもも

### 棚田保全活動のキーワードと伝統行事

棚田学会編集委員 大澤 啓志

今号の表紙は、「つなぐ棚田遺産」の個票のキャッチフレーズに示された活動のキーワードの集計結果

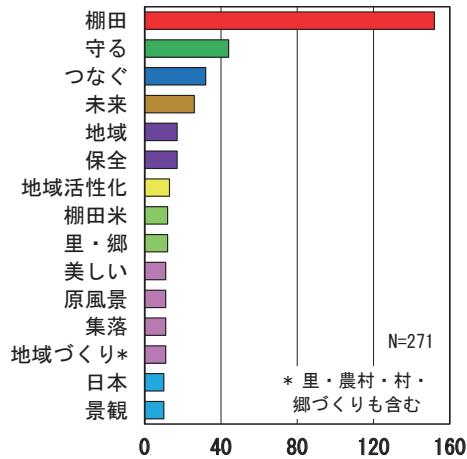


図1 活動キーワードの出現回数 (9地区以下は略)

です。当然「棚田」が最多で152地区(56.1%)、次いで「守る」が44地区(16.2%)、「つなぐ」が32地区(11.8%)、「未来」が26地区(9.6%)でした(図1)。「棚田を守り、未来につなぐ」といった、強い意志を読み取ることができます。以下、「地域」「保全」が17地区、「地域活性化」が13地区、「棚田米」「里・郷」が12地区、「美しい」「原風景」「集落」「地域づくり他」が11地区、「日本」「景観」が10地区でした。グラフでは略しましたが、「地域おこし」「風景」「残す」「活かす」が9地区、「みんな」「活動」「絶景」「農村」「伝える」「伝統・文化」「次代・次世代」が8地区、「農地」「棚田オーナー」「里山・山里」が7地区、「米づくり」「継承」「活用」「維持保全・管理」「望む・眺め・一望」「都市農村交流・農村交流」が6地区と続きます。

中でも「原風景」「景観」「風景」「絶景」「望む・眺め・一望」といった、棚田を見渡す形の景(＝ランドスケープ)に関わるキーワードが多いのも(合わせると44地区)、当然と言えば当然ですが、注目です。キーワードにこそ挙がっていませんでしたが、人の農的な働きかけの継続によって形作られる棚田は、棚田の生物多様性と合わせて「文化的景観(人と自然の共同作品)」に相応しいものと考えられ、我々が棚田に惹かれる要因の一つとなっているためです。この文化的景観を維持するには、稲作や水管理の技術のみならず、例えば今号の通信にあるような伝統行事を含めた地域全体で集落活動を持続するローカル・ソフトウェアの重要性も忘れてはならないと思います(図2)。

他にも、出現回数は多くはないものの、魅力的なキーワードが幾つも散見されます。表紙のキーワード群を眺めながら、それぞれの地区での個性ある活動に思いを馳せてみて下さい。



\* 地域内に閉じて執り行うものから、外部に開いた(見るだけ～行事に参加する～行事と一緒に作り上げる)のまで、地域に応じて多様なやり方があり得る。

図2 文化的景観を支えるローカル・ソフトウェア

## 事務局ニュース

### ■ 2023年度棚田学会大会のお知らせ

日時：8月26日(土) 10:30～17:00

会場：東京大学農学部 中島董一郎記念ホール

(Web配信有) 詳しくは、学会HPをご覧ください。

### ■ 2023年度棚田学会発表会のお知らせ

日時：12月2日(土) (予定)

会場、プログラム等は決まり次第ご案内します。

棚田学会通信 第70号 2023年6月30日発行  
発行/棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagakkai@gmail.com